



beyond
2020

平城宮跡資料館 令和元年度 冬期企画展

発掘された平城 2019

The Archaeology of Ancient Nara 2019

箱形土製品・蓋（部分）
平城第 601 次調査出土

2020.2/1 ~ 3/29

独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所

<https://www.nabunken.go.jp/heijo/museum/> お問い合わせ: TEL 0742-30-6753(連携推進課)

平城宮東院地区の調査(第595次)

2018年1月22日～7月13日

東院の台所発見！！

調査の進む東院地区



▲ 第595次調査区全景(南東から)

平城宮跡の東張出南半部を東院地区と呼んでいます。東院地区には、首皇子(のちの聖武天皇)の東宮、称徳天皇の東院玉殿、光仁天皇の楊梅宮などがあったと考えられています。奈文研では、東院地区の発掘調査を長年にわたり継続しており、特に2004年度からは、東院地区中核部の内容把握を目的に発掘調査を進めています。

今回の調査では、地上式竈の跡と考えられる方形区画遺構や複数の南北棟建物を検出するなど、東院地区の実態を考える上で重要な知見を得ました。方形区画遺構の類例はこれまで知られておらず、今回の調査における大きな発見です。

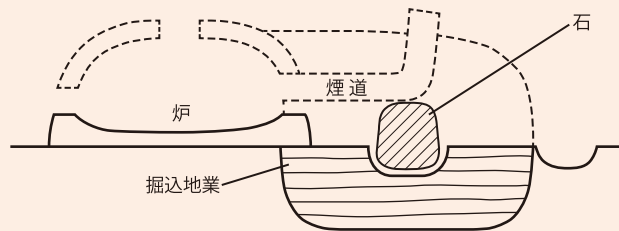
加熱調理をしていた？ 地上式竈の発見



▲ 方形区画遺構検出状況(北東から)



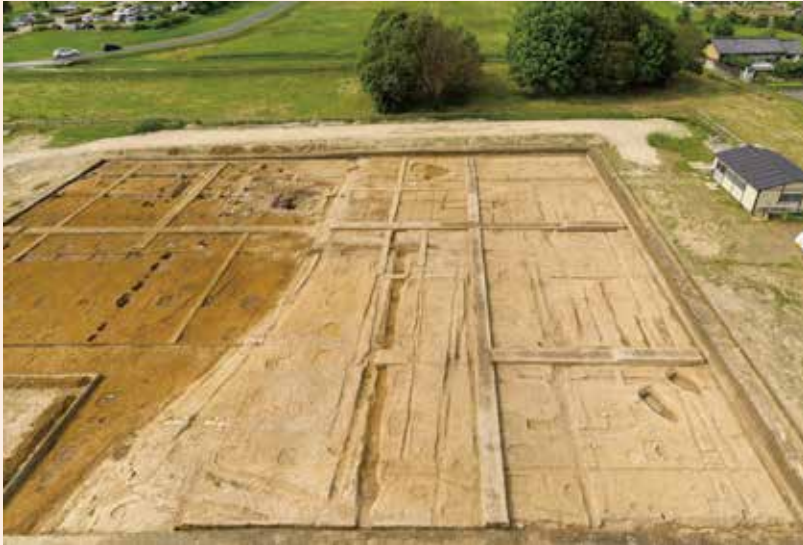
▲ 被熱状況(拡大図)



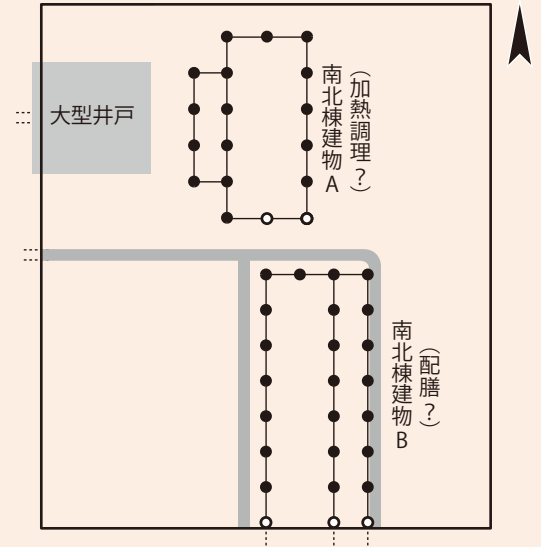
▲ 地上式竈の復元断面図

調査区東北部では、簡易的な覆屋の痕跡をともなう方形区画遺構8基を発見しました。これらは、平城還都直後に造られたと考えられます。方形区画遺構は、多量の炭を含む溝で周囲を囲んでおり、内部では南北にならぶ被熱痕跡(火を受けた痕)や部分的な掘込地業等が見つかりました。被熱痕跡の埋土には炭や粘土が多く含まれており、さらに被熱状況に偏りがあることから、何らかの上部構造をともなっていたと推測できます。この被熱痕跡のそばでは石を抜き取った痕が見つかり、直接火を受けていないことから、煙道を支える石が置かれていたと考えられます。これらのことから、この方形区画遺構は建ちならんだ地上式の竈の跡とみられ、火を用いた調理がおこなわれていた可能性があります。

大規模に展開！東院くりやの厨の実態とは？



▲ 南北棟建物検出状況(南から)



▲ 第595次調査区

調査区東北部でみつかった方形区画遺構とはべつに、奈良時代後半の南北棟建物が2棟見つかりました。

北側の南北棟建物Aの周辺では、4ヵ所の被熱痕跡と炭を含む層が広範囲に広がっていることから、この建物は加熱調理に関連する施設であったととらえられます。一方、南側の南北棟建物Bの周辺では、炭はさほど検出されず、建物を区画する溝から食器が多量に出土していることから、この建物は配膳はいぜん(料理の盛り付け)に関連する施設であったと推測されます。南北棟建物A・Bとも広い意味での調理に関わる施設とみられますが、担う役割は異なります。それらが計画的に配置され、一連の厨(台所)を構成していたことがあきらかになりました。



▲ 大型井戸と階段の検出状況(北西から)

ところで、今回の調査区のすぐ西側でおこなった2017年度の調査では、大型井戸がみつかっています。この井戸も厨の一部と考えられ、調理や洗い場などで使用する水を汲み出していたと考えられます。さらに、今回の調査ではこの井戸と南北棟建物Aとをつなぐ石組みの階段もみつかっており、両者が一体的に利用されていたことがわかりました。南北棟建物Bも含め、それぞれ異なる役割を担う複数の施設がセットとなり、大規模な厨を構成していたと考えられます。東院では種々の宴が催されたことが知られますが、そこで供する食事も、この厨で調理されたものかもしれません。

コラム

平城宮はもともと正方形と考えられてきましたが、国道24号バイパスが平城宮跡東辺沿いに計画されたことにともなう事前の発掘調査で、東に張り出し部分をもつことがあきらかになりました。

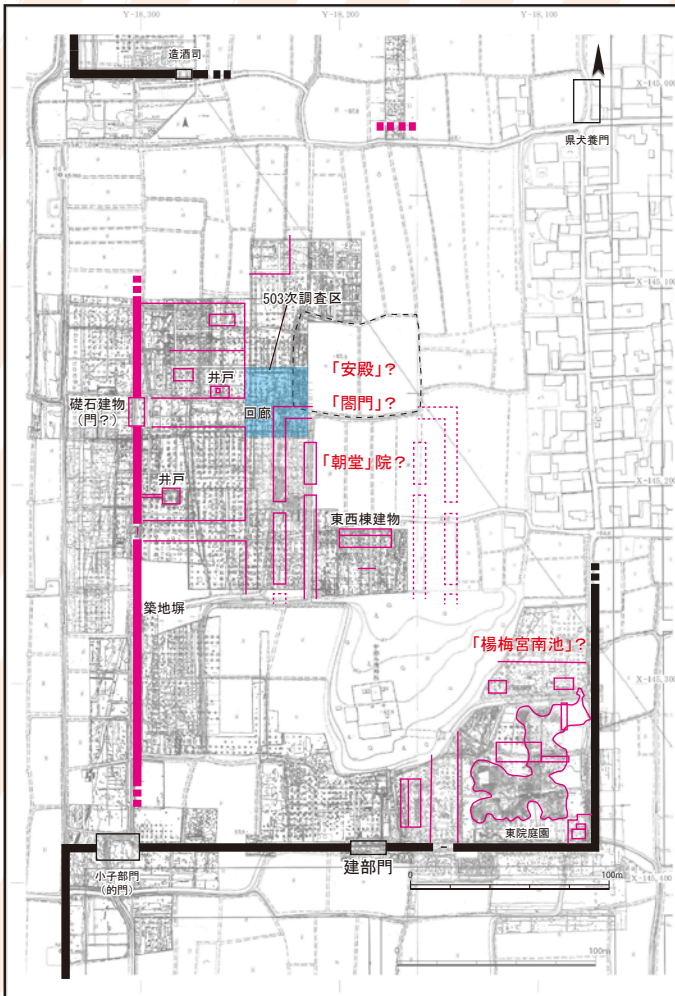
この東院地区に存在したとされる「東院玉殿」は、瑠璃色の瓦(緑釉瓦)を葺き、水草の絵の文様が描かれたきらびやかな建物だったことが『続日本紀』に記録されています。ところが、これまでの調査では玉殿の存在は確認できていません。

東院地区には、まだまだたくさんの謎があり、これからの発掘調査が楽しみです。

だんだんわかってきた楊梅宮



▲ 第503次調査区全景(西から)
※調査区奥に見える広場がかつての大きな水田区画



▲ 東院6期の遺構群(楊梅宮)

楊梅宮とは

奈良時代末頃の東院地区には、宝亀4年(773)に完成した光仁天皇の「楊梅宮」という宮殿があり、儀式や宴会がおこなわれていました。

文献資料から、楊梅宮には光仁天皇が起居し、貴族たちと饗宴を催した「安殿」や帰属した蝦夷に対する饗宴をおこなった「朝堂」、またそれらの間に設けたとみられる「閣門」など、複数の建物があったと想定されていましたが、第503次調査で楊梅宮の回廊西北隅を検出したことをきっかけに少しずつ実態があきらかになってきています。

東院6期の建物群と楊梅宮

東院地区では、多くの遺構を検出しており、6時期に区分しています。このうち、東院6期の遺構群が楊梅宮を構成する建物群と考えられています。

東院6期遺構群は全体を築地塙で囲み、長大な回廊が囲む中枢施設と掘立柱塙で囲んだ複数の区画による外郭施設から構成されます。

中枢施設では、南北棟建物2棟と北廂付きの東西棟建物、掘立柱塙を検出しており、建部門を通る中軸線上で東西対称になると推測されます。

正殿は未検出ですが、東院地区の遺存地割を見ると回廊北方に大きな水田区画があります。ここは東院地区が立地する尾根のもっとも高い地点という良好な場所で、この地割が正殿とそれを囲む区画を反映しているようです。つまり、大きな畔に囲まれた未調査地に「安殿」「閣門」があり、回廊が囲む空間は楊梅宮の「朝堂」が置かれた楊梅宮朝堂院にあたる可能性があります。楊梅宮の全容解明には、今後の調査が期待されます。

左京二条二坊十五坪の調査(第601次)

2018年7月5日～ 9月3日

なにがあった？ 平城京の一等地！

本調査区周辺は、藤原不^ふ比^ひ等^と邸^い(のちの皇后宮、法華寺^{ほけ}および阿^あ弥^み陀^だ浄^{じょう}土^ど院^{いん})が所在^{ざんざい}しており、三^{さん}彩^{さい}瓦^{がわ}や生産^{せいさん}関連^{かんれん}遺^い物^{ぶつ}が多く出土^{しゅつち}していることから、平城京内でも特殊^{とくしゆ}な空間^{くわんかん}であったと推測^{すいさく}でき、遺跡^{いせき}の性格^{せいかく}が注目^{ちゆりやうめい}されています。今回の調査^{きんげん}では、奈良時代前半^{なら}の生産^{せいさん}関連^{かんれん}遺^い物^{ぶつ}が多数^{たうすう}出土^{しゅつち}した大型^{たいけい}土^ど坑^{けい}、奈良時代後半^{なら}～末^{すえ}の八角形^{はちがくけい}の柱^{はしら}を用いた総柱^{そうちゆう}の建物^{けんぶつ}などを検出^{けんしゅつ}しました。



▲ 調査区遺構検出状況(拡張前 南西から)



▲ 三彩瓦

色鮮やかな三彩の瓦

三彩瓦は三色の釉^{ゆう}葉^{やく}で塗り分けた瓦で、平城宮・京でも出土地^{しゅつち}点^{てん}が限^{かぎ}られている特別な^{とくべつな}瓦^{がわ}です。

そうしたなか、この坪内からは、これまで173点もの三彩瓦が出土しています。今回も、調査区の西北部を中心に出土しました。三彩瓦が集中して出土するこの地区は平城京内でも特異な地域といえます。



▲ 冶金関連遺物

多様な生産関連遺物

調査区西部でみつかった大型の土坑(ごみすて穴)からは、奈良時代前半の土器とともに炭や鉄、銅、ガラス製品の生産に関連する冶金^{やきん}関連^{かんれん}遺^い物^{ぶつ}が多数^{たうすう}出土^{しゅつち}しました。これらを用いていた工房^{こうぼう}がどこにあるかは、まだわかっていません。



▲ 箱形土製品

初公開！なぞの箱形土製品

いくつもみつまっている生産関連遺物。なかでも特異な土製品が特筆^{とくへつ}されます。それは、箱形をしていて、表面は高熱を受けて変色^{へんしよく}しています。蓋^{ふた}と組み合わせて使ったようで、蓋のつまみの部分には笑った人の顔にみえる模様が施されているものもあります。平城京内はもちろん他の地域でも類例はなく、その用途についてはよくわかりません。一体何に使われたものなのでしょうか。

西大寺旧境内の調査(第597次)

2018年2月20日～3月30日

さいだいじ どうぼん 西大寺の幢幡遺構発見！

本調査では、中世の西大寺旧境内における土地利用や西大寺造営以前の平城京右京域の条坊道路を検討するための情報を得ることができました。特に、西大寺^{こんどういん}金堂院回廊の東南にあたる場所からみつかった幢幡^{とうぼん}遺構は注目に値します。

※ 寺院や宮殿^{おごそ}を厳かに飾る旗

幢幡遺構の認定



▲ 西大寺旧境内で検出した掘立柱(北東から)

今回検出された大型の掘立柱は、直径約0.7mの柱の周りに13点の部材^{いげた}を井桁状に組むことで、中心の柱を強固に直立させていることがわかりました。そして、以下の点から幢幡遺構と考えられます。

- ① 柱の三方向に建物として組み合う柱がなく、独立している。
- ② 宝亀11年(780)の『西大寺^{さいだいじ}資財流^{しざいりゅう}記帳^{きちょう}』によると、金堂院の建物に並んで「幢^{とう}」が記されており、文献資料からも幢幡の存在が確認できる。
- ③ 同時期の尼寺である西隆寺^{さいりゅうじ}の調査でも類似の遺構がみつっている。
- ④ 柱の出土地点が西大寺金堂院回廊の東南に位置し、伽藍^{がらん}と幢幡の位置関係が西隆寺と類似する。

モノの記録方法—実測図、写真、^{たくぼん}拓本、赤外線写真

出土した柱には多くの情報が残されています。伐採、製材の痕跡や、加工痕の有無、木取りなどの情報を、観察から導き出すのが考古学研究者の腕の見せどころ。拓本や赤外線写真など、多くの手法を組み合わせ、モノを読み解く作業が日々、おこなわれています。



▲ 写真



▲ 拓本(※1)



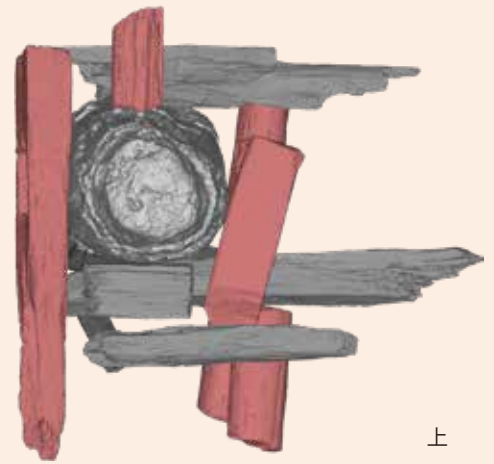
▲ 赤外線写真(※2)

※1：遺物表面の微細な道具痕跡を拓本で採取します。刃こぼれの痕跡や、動作など当時の動きを読み解くことができます。

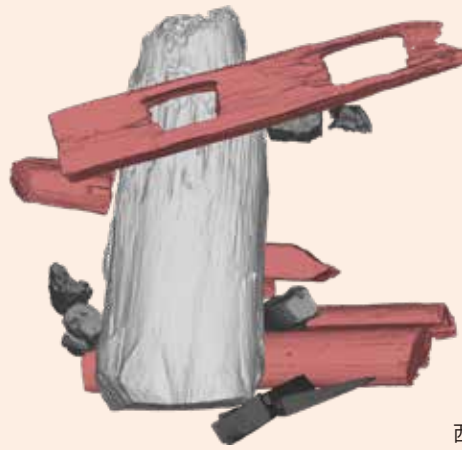
※2：加工当時の目印として引かれた墨書きの線。柱根の心を通るように引かれています。赤外線写真では、肉眼では見えない情報も鮮明に見ることができます。

最新技術で読み解く、出土木材の配置構造

土の中での構造物の立体的な情報は、従来の考古学の記録方法だけでは非常に難しいものでした。また、部材を取り上げながら、上から下へと掘り下げて、その構造を調べていくため、発掘現場ではすべてが組み合った状態を観察できるわけではありません。しかし、近年、飛躍的に進歩した三次元計測の技術—SfM-MVS(Structure from Motion and Multi-View Stereo)技術—によって、立体的な記録や土の中で部材の位置関係やその状況を把握できるようになりました。



上



西



南

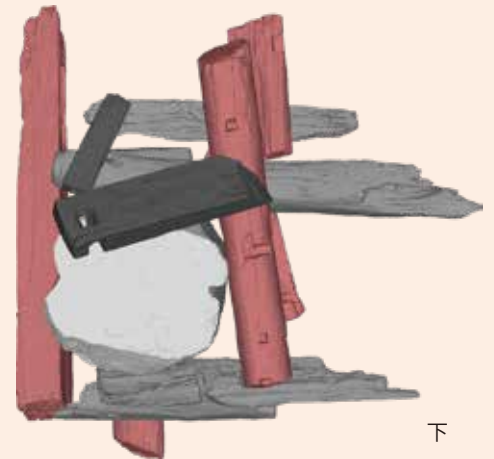
【凡例】

- 底面の材
- 南北方向の材
- 東西方向の材

発掘調査では特に、底面(下)からと壁側(西)からの図面は現場では取得できないものです。さらに、三次元モデルから、出土した柱の根固めの工程を復元することが容易となりました。

発掘調査は一度きりです。限られた時間、労力、コストで遺跡から最大限の情報をひきだすために、最良の方法を常に模索しながら調査はおこなわれています。

各方向からみた木材の配置状況(作成者：中村亜希子、浦蓉子、金田明大、山口欧志) ▶



下

コラム



▲ 木屑



▲ 奈良時代の手斧(復元)

左の写真は、幢幡遺構の大型部材とともにみつかった木屑きくず。ただの木屑のようにみえますが、木材加工の痕跡をのこす貴重な資料です。右写真の手斧ちようなのような工具で加工したようです。

今回みつかった大型部材のいくつかは建築部材の転用です。木屑がいっしょにみつかったことは、この場で部材を再加工したことを示します。

平城宮東区朝堂院の調査(第602次)

2018年10月1日～2019年1月21日

東門の全容があきらかに！



▲ 第602次調査区全景
(奈良時代前半の遺構検出状況、南東から)

本調査は、東区朝堂院東門の全体像をあきらかにする調査であり、これをもって東区朝堂院の調査は一区切りつきました。今回は、奈良時代前半の東門と朝堂院東面を区画した掘立柱塀、奈良時代後半の東門とそれに取り付く築地塀などを検出しました。

奈良時代前半の東門は掘立柱建物で、同時期の朝堂院東第二堂、第三堂と柱筋がそろい、朝堂院全体の建物配置や平面計画にもとづいて建てられたことがわかりました。

奈良時代後半の東門は礎石建ちで、前半東門の基壇規模を引き継いでいます。この基壇規模や平面形式は、復元されている東院南門(建部門)と同様です。

このほか、東区朝堂院の建替時期の解明や建物復元のための手がかりも得ました。

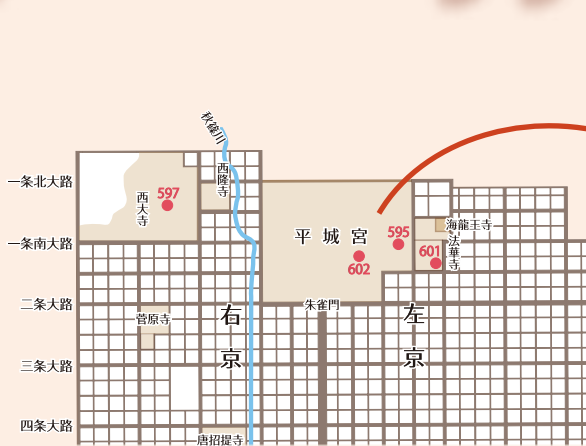


▲ 復元された東院南門(南西から)

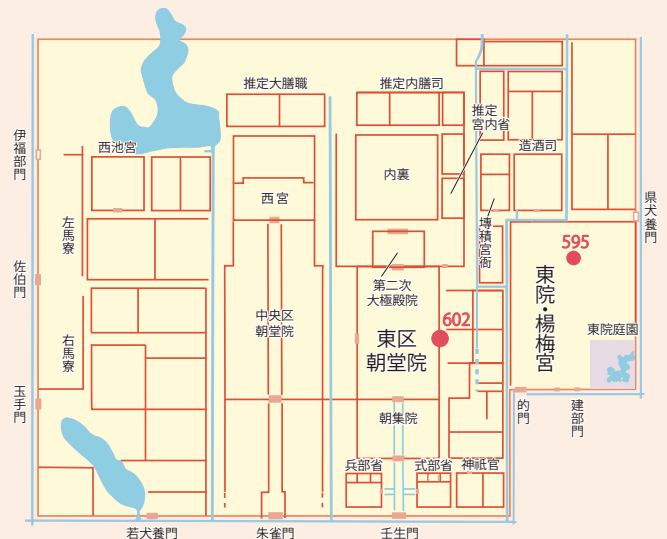


▲ 東門を通して東区朝堂院を望む(東から)

発掘調査位置図



平城京(平城宮周辺を一部拡大)



奈良時代後半の平城宮